The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 歴史という水槽 : アンドレ・マルローの歴史観に関する考察 |
| Author(s) | 井上, 俊博 |
| Citation | Gallia. 2016, 55, p. 115-124 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/61963 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 歴史という水槽
## ―― アンドレ・マルローの歴史観に関する考察 ――

井上　俊博

### 序

アンドレ・マルローは1960年東京で行った講演の中で、現代は文明の複数性を発見した時代であり、この発見は「これまでの歴史に対する考えを根底から覆す」ことにつながったと述べている[1)]。この文明の複数性に関して、マルローは1946年に行った講演の中で個々の文明を「閉じられた世界」と呼んでおり、それぞれが独自の人間存在に対する価値観や精神構造を内包し、一つになることなく互いに隔たったまま現代に伝達されたと考えていた[2)]。では、このような文明の在り方を見出すことによって覆されるこれまでの歴史観とは如何なるものであったのか。また、マルローは中国における共産主義革命を背景とした『征服者』『人間の条件』やスペイン内戦を舞台とした『希望』など、20世紀における歴史的出来事を扱った小説を発表した。既存の歴史観に対して否定的でありながら、このように歴史的事件を積極的に取り上げたマルローにとっての歴史とは如何なるものであったのか。本論はマルローの歴史観および彼にとっての歴史が持つ意味を明らかにすることを目的とする。

### 1.「これまでの歴史観」と文明の複数性

マルローの歴史観について考察するにあたり、まずは文明の複数性の発見とともに否定された「これまでの歴史観」とは如何なるものを指すのか考察する必要があるだろう。1960年の講演の中でマルローは、過去の諸文明は一つの流れとなって発展を続け現代に到達したのではなく、互いに理解し合うことなくそれぞれが「固有の真実 sa propre vérité」を探求したのであり、このような文明の多数性を前にしては「ヘーゲル思想が如何なる力を持とうとも、歴史の現象学など存在しない」と述べている[3)]。つまり、マルローにとっての新しい文明観＝文明の複数性と対比し、否定されるべきものとしてヘーゲル思想がまず挙げられている。

では、マルローはヘーゲルの思想をどのようなものとして考えていたのだろうか。ヘーゲルに関するマルローの言及は1943年に出版されたマルローの小説『ア

1）堀田郷弘「東京日仏学院開会式におけるマルロー氏の演説（1960年2月22日）と東京羽田空港におけるインタヴュー（2月29日）」『城西人文研究』第5号、1978年、p.134.　なお和訳に関しては『城西人文研究』第5号内の堀田氏の訳を参考に筆者が訳出したものである。また、本稿における引用中の下線は全て筆者によるものである。

2）マルローにおける文明の複数性に関しては拙稿「アンドレ・マルロー　閉じられた世界から惑星的文明へ」『大阪大学フランス語フランス文学会 Gallia』54号、2015年を参照されたい。

3）堀田郷弘 , *op.cit.*, p.134.

ルテンブルクのくるみの木』にも見受けられる。この小説は第二次世界大戦を生きる主人公の物語と、第一次世界大戦前から始まり第一次世界大戦に従軍した主人公の父ヴァンサン・ベルジェの物語が交差する構成になっている。そしてこの小説の中で大きな比重を占めているのが、第一次世界大戦前夜に行われた人類学者や歴史学者などによるアルテンブルクの話会である。この話会の後半から議論の中心的役割を担うドイツ人人類学者メルベルクは、ヘーゲル以来のドイツ思想をもって歴史の表示者とする思想を象徴する人物として周囲の学者達から目されていた[4)]。そしてこのドイツ思想、すなわちヘーゲルの歴史哲学は、「歴史学や人類学の知識によってもたらされた諸事実を《世界精神 *Weltgeist*》[5)]に統合」し、「一つの歴史 *une* histoire」を形成するものであると、マルローはもう一人の登場人物シュティークリッツに語らせている[6)]。だが、メルベルクが語ったものはこうした統合力を持ったヘーゲルの歴史哲学とは相容れぬものであった。

ヘーゲル哲学に代わってメルベルクの口から語られるのは、「様々な信仰や神話の下に、また特に多種多様な精神構造の下に、多様な地域を通じて承認しうるような、歴史を通じて承認しうるような、人間という概念をその上に打ち建てることが可能な恒久的事項を見出すことは可能だろうか？」という問いであり、また、全ての時代・文化・地域を越え共通する「人間という概念は意味を持つだろうか？」という問いであった[7)]。これらの問いにおいては、「一つの歴史」の中に共通基盤として内包される人間そのものが懐疑の対象となっている。ヘーゲルの歴史哲学では、世界史の主人公としての精神が自己認識に至るために各文明の独自性は剥奪される。これに対しメルベルクの懐疑では、各文明固有の文化・宗教・精神構造といった現在に対する「過去の異質性」が前提として存在している。

メルベルクは、例えば宗教的文明においては神がそうであるように、文明にはそれぞれの精神構造の中で絶対的地位を占め、不可侵な「独自の明白な事実 une évidence particulière」「宿命の形態 la forme de leur fatalité」が存在し、これが人

---

4）André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II , «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1996, p.670.　なお、本論文引用部の翻訳に関してはアンドレ・マルロー『世界の文学 41』収録『アルテンブルクのくるみの木』橋本一明訳、中央公論社、1964 年を参照し、拙訳を試みた。

5）ヘーゲルの歴史哲学に関して、鹿島徹は歴史の物語理論にたってヘーゲルの歴史論を解釈している。彼によれば、ヘーゲルにとっての「精神」とは自己認識を本質とする。以下は鹿島によるヘーゲルにおける世界精神に関する考察の要約である。精神は自己を対象ないし他者として自己の外に定立しつつ、自己認識というおのれの本質を実現する。精神の歴史は、「世界精神」の目的論的自己認識運動というメタストーリーに基づき、「世界史」として物語られる。歴史の個別的段階は人倫共同体が解体・没落に向かう過程として描かれるが、これら個別的歴史段階を貫く全体としての精神が世界史の主人公としての世界精神である。この世界史というメタストーリーは、過去との断絶を含まない人間存在の現時充足性を目指す。現在の来歴を自己認識を本質とする精神の運動として物語ることで、過去との断絶を招来した「家郷性の喪失」をこの運動の必然的な段階ととらえる。過去は精神の自己認識のための他者として必然的存立契機となり、異質性を含まないものとして＜現在化＝現前化＞される。過去は過去として想起されるが、精神の物語の中に位置づけられることでその異質性を剥奪される。
鹿島徹「歴史の物語りとしてのヘーゲル歴史哲学」『歴史の現象学』、世界書院、1996 年、pp.210-215.

6）André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II , p.691.

7）*Ibid.*, p.681.

間の行動や思考を制限し、人間の生を秩序付けるものであると述べている。そしてこの「独自の明白な事実」「宿命の形態」は「水槽 aquarium」と表現されており、対して人間はその中で生きている「魚」という関係にある[8)]。つまり、この「水槽」とは、その中で生きる人間にとって、地理的条件ではなく精神的な意味においての「世界」と言い換えることができるだろう。時代や地域が異なる諸文明は、一つ一つがこの水槽のようなものであり、その中で生きる人間は限定され互いに隔たっている。そしてこのようなメルベルクの考えは、過去の文明、あるいは非欧州文明に対してだけ向けられているのではない。かつて宗教的文明において人間は創造主である神の存在を絶対的前提として生きてきた。同様に、現代欧州もまた一つの精神構造に内包されているのであり、現代欧州人の思考や行動を制限する欧州固有の領域＝水槽とは「歴史 l'histoire」であると、マルローはメルベルクに語らせている[9)]。よって、現代欧州人は「歴史が考えさせることのみを考えている」[10)] に過ぎないのであり、現代欧州人の思考を制限しているこの「歴史という水槽」の中で生きる魚であるところの人間の思考は、この水槽の域を出ることはない。

メルベルクを通じて語られたこのような考えに基づくならば、過去や現代の多種多様な文明・文化・精神構造における独自性、そして神話や宗教的教義によって物語られる独自の価値観を排除し、一つの精神の物語としてこれらを内包し統合しようとするヘーゲルの歴史哲学もまた、人間を内包する数ある水槽の一つに過ぎず、「世界精神が自己の本質を認識する」ことを目的とする世界史・メタストーリー形成という枠組みの中でしか思考していないということになる。このような視点をヘーゲル歴史哲学の構造と比較するならば、ヘーゲル歴史哲学は世界精神という一本の主柱が構造基盤として存在し、煉瓦のようにこの主柱に支えられながら諸文明は一つの構造物として形成されていく。世界精神はこの構造物としての全体像を形成することで、現時充足を達成する。諸文明の勃興はこの構造物を形成するための建設という精神の運動としてとらえられ、個々の文明は構造物の一部として意味を持つのであり、メタストーリーの中に内包され、個々の独自性は排除される。

しかしメルベルクを通じて語られた文明の複数性を基盤とするマルローの歴史観においては、個々の文明はそれぞれが一つの水槽であり、中核をなす主柱が存在しないまま、過去から現在へ向かって並置され、堆積していく。個々の水槽間の関係性は、この並置・堆積のみに存在し、これは言うならば様々な内容の書物

8）*Ibid.*, p.686. : « Qu'il s'agisse de Dieu dans les civilisations religieuses, ou du lien avec le cosmos dans les civilisations antérieures, chaque structure mentale tient pour absolue, inattaquable, une évidence particulière qui ordonne la vie, et sans laquelle l'homme ne pourrait ni penser ni agir. [...] Elle[=une évidence particulière] est à l'homme ce que l'aquarium est au poisson qui y nage. [...] les hommes sont le plus profondément définis, et séparés, par la forme de leur fatalité. »

9）*Ibid.*, p.687. : « Il y a une évidence, messieurs, [...] Nous y vivons comme les civilisations religieuses vivaient en Dieu. Sans elle[=une évidence] aucun de nous ― je dis seulement : de nous ― ne pourrait penser. C'est notre propre domaine : c'est l'histoire. »

10）*Ibid.*, p.688.

を積み重ねていくようなものである。個々の書物にはそれぞれのストーリーが内包されており、これらを積み重ねていったとしても、それぞれのストーリーが混ざり合い一つのストーリーを形成することはない。そしてマルローは、個々のストーリーとしての文明同士が交流する場合、それぞれの文明は自らの文明よりも劣ったもの、そして敵としてしか他文明を認識していなかったのであり[11]、異質なものとして他文明の精神構造を攻撃・破壊し、改宗させるという形しかとらなかったと考えている[12]。すなわち、文明は他の文明を征服し、滅ぼすことでしか他者を知らなかったのである。

そしてマルローにとって、ヘーゲル歴史哲学的世界もまた、一冊の書物の中に内包されたストーリーの一つに過ぎず、たとえそれが書物の堆積の頂点に存在しているとしても、その下部に存在する多様なストーリーを統合する力を持っているとは言えないのである。一つのストーリーはあくまでも一個のストーリーに過ぎず、そこに内包される個々の人間にとってはメタストーリーとしての役割を演じることが可能であっても、どのようなストーリーも積み重ねられた書物の堆積全体としてのメタストーリーの役割を演じることはできない。そして一つのストーリーの中の登場人物であり、水槽に内包された魚であるところの人間は自身を内包するストーリーのみしか知りえないのである。この様な人間の在り方をを象徴するのがもう一人の登場人物・中世ドイツの解釈学者シュティークリッツである。彼はメルベルクによって提起された「地域・文化・時代を越えて通底し共通の基盤とすることが可能な人間という概念が存在しうるか」という問題に議論が移っているにもかかわらず、学術的研究によってもたらされた多様な文化、精神構造に関する諸事実を「世界精神」に統合し、一つの歴史を形成しようとする考えに固執し、歴史を形成する根本であるところの「人間という共通の基盤」の存在を疑うことはない[13]。つまり彼はヘーゲル的歴史観という自らを内包する水槽の尺度に応じた解釈を行っているだけであり、自らが水槽に内包された魚に過ぎないという自覚を持ち合わせてはいないのである。

この自覚を有しているという点で、メルベルクの視点はシュティークリッツと比較して俯瞰的なものであると言えるだろう。そして人間の思考や生を規定する水槽の複数性を見渡すこの俯瞰性を獲得したことにより、ヘーゲルの「世界精神」はその統合力を疑問視され、全体性を持つものではなく欧州に限定された「地域的なもの local」[14] に失墜してしまうのである。また、このような俯瞰性を獲得し、個々の文明間に存在する断絶と固有性を発見し、そして自らが属する西欧という

11）堀田郷弘 , *op.cit.*, p.135. : « [...] car, autrefois, chaque civilisation ne connaissait les autres que comme primitives ou comme ennemies. Pour le christianisme, jusqu'à la Renaissance, Grèce fut un moment de l'histoire qui aboutissait à elle et l'Islam était simplement un ennemi, comme l'était l'Inde, comme l'était le Japon. »

12）André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II, pp.691-692. : « Les états psychiques successifs de l'humanité sont irréductiblement différents, parce qu'ils n'affectent pas, ne cultivent pas, n'engagent pas la même *part* de l'homme. Sur l'essentiel, Platon et saint Paul ne peuvent ni s'accorder ni se convaincre : ils ne peuvent que se convertir. »

13）*Ibid.*, p.691.

14）*Ibid.*, p.668.

水槽もまた数ある精神構造の一つに過ぎないという発見と自覚を得たことにより、「様々な信仰や神話の下に、またとくに多種多様な精神構造の下に、多様な地域を通じて承認しうるような、歴史を通じて承認しうるような、人間という概念をその上に打ち建てることが可能な恒久的事項を見出すことは可能だろうか？」[15] という問いが生まれたのである。

文明の複数性が見出されることで否定されることとなったマルローにとっての「これまでの歴史観」とは、多様な文明や精神構造を統合し一つの普遍的歴史に収斂することを目的とするヘーゲル的歴史観であると言えよう[16]。

## 2. 時間という水槽の中の欧州

以上のように、文明の複数性を発見した現代欧州は、もはやヘーゲル歴史哲学という「これまでの歴史観」の中に安住することはできないとマルローは考えている。ヘーゲル歴史哲学は統合力を持ち、個々の文明に対してメタストーリーとして君臨したが、これはこの哲学が「世界精神の働きを世界史の実態的過程とみなす＜超 - 実体論的歴史哲学＞であることになり、それを物語る哲学的世界史はこの実体的過程の唯一可能な把握として、歴史の物語りの複数性を排除する」[17] という限りにおいてなのである。「自らの言説を唯一正統なものと主張し、他の言説を排除する」[18] という意味において、このようなヘーゲル歴史哲学をマルローは「大きな物語」[19] とみなしていたと言える。

だが注意したいのが、メルベルクは「独自の明白な事実」「宿命の形態」である「水槽」すなわち文明の複数性について言及した直後に現代西欧を内包する水槽は「歴史」であると述べている点である[20]。だがこれは、俯瞰的視点を獲得しながらも未だにヘーゲル的統合力に固執していることを意味してはいない。文明の複数性の発見は、「歴史」という言葉の指示対象に変化を生じさせる。

---

15）Cf. 注 7.

16）この点に関して Gérard Fritz もまた、20 世紀初頭マルローは歴史にとらわれているという感情を抱いていたと指摘している。19 世紀はヘーゲルなどにより歴史はただ偶然の堆積ではなく、何かしらの目的や完結へと向かう人間の運動であるという確信と意味を与えられていたが、19 世紀終盤ニーチェの登場によりこの確信は揺らぎ始め、さらに第一次世界大戦によって 19 世紀的確信は崩れ去ったのであり、マルローはこの崩壊後の世代に属していると指摘している。
Gérard Fritz, «*Lecture et discours de l'histoire chez Malraux*» , in *ACTES ET COLLOQUES*, 26. *Le livre dans la vie et l'œuvre d'André Malraux*, 1988, P.60.

17）鹿島徹、*op.cit.*, p.217.

18）石毛弓、「リオタールの大きな物語と小さな物語―概念の定義とその発展の可能性について」『龍谷哲学論集』21 号、2007 年、pp.53-56.
石毛はリオタールが「大きな物語」と呼んだ近代理念における特徴として、異なる言説全てを自らの言説のサブクラスに属するとみなす点を挙げている。そしてこのような近代の理念には「3 つの大きな特徴」が存在すると指摘している。一つは、人間は理性により自ら地域性を越えた普遍へと向かうという理性への信頼、二つ目は達成されるべき目標としての近代理念の、他の理念に対する絶対的優位、そして最後に、現状を劣ったものとし、近代理念が掲げる理念の達成によってのみ現状から脱することができるという、現状からの救済を最終目標とするその達成目標の内容である。

19）Jean-François Lyotard, *La Condition postmoderne*, Les Éditions de Minuit, 1979, p.7.

20）Cf. 注 8. および注 9.

「そしてきっと…」メルベルクは再び口を開いた。「歴史の背後には何ものかが存在します。歴史に対して、歴史が国家や革命に対してあるのと同じ関係のものが。おそらく時間についての我々の意識です—我々の概念とは言いません—これは最近のものです…［...］我々は歴史が我々に考えさせることのみを考えていますが、おそらくそれに意味はないのです。もし世界が意味を持つとすれば、死も、キリスト教的世界におけると同様、そこにおのれの場所を見出すはずです。もし人類の運命が一つの歴史 une Histoire であるなら、死は生の一部をなすものです。しかし、そうでないなら、生は死の一部をなしています。［...］かりにさまざまな精神構造があのプレシオサウルスのように消滅して再び帰ることがないとすれば、かりにさまざまな文化が人間を底のない虚無の樽に投げ込むためにのみ相次ぐ価値があるのだとすれば、［...］人間たちが何世紀かにわたって自分たちの概念や技術を伝承しようと、そんなことは問題ではありません。なぜなら、人間は一つの偶然であり、要するに、世界は忘却によって作られているからです。」[21)]

創造主である神と結びついた世界であれば、神を讃えることで人間はその教義が提示する魂の永遠へと結びつき、聖書的世界というメタストーリーの中で個々の人間の死は永遠に至る一契機として克服される。また、ヘーゲル歴史哲学的世界においては、全ての過去は世界精神の自己認識運動としてとらえられ、過去の個々の段階に内包されていた人間の死は、精神の自己認識という目的の中で昇華される。また、国家や革命も「祖国のために」あるいは「理想的社会実現のために」というスローガンの下、死者達の死に対して国家の来歴や革命を物語るものとしての歴史という、個人の死以上の意味が与えられてきたのは、我々もよく知るところである。いずれにせよ、人間を内包する精神構造という水槽・世界の性質が個々の人間に対して死を超越可能なものとする意味を提示できるものである限り、人間は世界の中に自らの死を越えた存在意義を見出すことが可能であるとマルローは考えているのである。だが、文明の複数性を発見し、死を超えた意味を人間に付与可能なヘーゲル的世界が否定された今、歴史が西欧に残すのは考古学的研究などがもたらした、方向性を失った断片としての過去の諸文明に関する知識だけである。そしてこのような過去は、人間が生み出した諸文明や様々な精神構造は恐竜の様に滅んでいき、時間の経過と共に忘れ去られていった滅亡の連続でしかなかったという残酷な事実[22)]、そして文明や人間は二度と帰らぬ一回きり

21）André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II, pp.687-688.

22）マルローは『反回想録』の中で古代エジプト文明に関して言及しているが、彼によれば古代エジプト文明は死を超越可能なものと考え、その表現として様々な神々が存在していた。だが文明の崩壊と共に神々は意味を失い、死者の魂の永生を保証していたミイラは発掘されるまで忘れ去られていた唯の死体に成り果ててしまった。考古学はこれらを過去の精神構造として知識化することは可能であるが、その文明が保持していた価値や死を超越可能なものとする機能は回復することが出来ないとマルローは考えていた。André Malraux, *Œuvres complètes*, tome III, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1996, p.51, 58.

の「偶然」でしかないという虚無感をもたらすのである。そして数々の人間達の努力と無関係に流れ続け、それら全てを忘却と偶然に帰結させる「時間に対して人間は何も出来ない」[23] という時間の支配力に対する意識が、歴史に対する意識へとなっていくのである。被創造物である人間は神を讃えることで自らの存在価値を確認し、過去を知り世界精神に統合していくことで人間は自らの存在意義を歴史の中に見出した。そして祖国や理想への奉仕は、人間に存在意義を与えてきた。だが人間を内包する世界としての時間が人間の働きかけに対して無関係に存在し、また何の意味も人間に付与するものでないなら、歴史、つまり時間に対して考えたところで見出されるものは虚無感だけである。「時間としての歴史」が持つメタストーリーはこのような「時の経過とともに全てを無に帰させる死と忘却」という帰結へと向かうものであり、ヘーゲル歴史哲学が普遍的歴史へと全ての過去を統合するように、死と忘却へと全ての人間の生を統合するのである。

このように、「これまでの歴史観」においては、歴史という言葉の背後にはヘーゲルの歴史哲学が存在していたが、文明の複数性を知った今、「歴史」という言葉の指示対象がヘーゲル歴史哲学から「時間」へと変化したとマルローは考えているのである。現代の西欧人を内包し、その生を規定する水槽、すなわち「独自の明白な事実 une évidence particulière」「宿命の形態 la forme de leur fatalité」は、今や人間を無に帰させる「時間」そしてその帰結としての「意味のない死」であり[24]、西欧人は死と時間を前にして自らの意味を模索するのである。

### 3. 行動の対象としての歴史・時間

以上のように、マルローにとって歴史に対する意識は時間に対する意識となり、その思索は死と虚無を前にした人間存在の意味の模索となる[25]。

しかし、人間を内包する世界であるところの水槽、すなわち時間は、人間存在に意味を与える作用を持ち合わせてはいない。では人間はどこに自らの意味を見出そうというのか。西欧は今や、人間自身の内に自らの意味を探し求めていると、マルローは考えている。以下は『西欧の誘惑』(1926) からの引用である。

> 人間は世界の中に、そして神の中に、自らの姿を見出しました。あなたが今観察していた西欧人達は、彼ら自身の内に自分自身を探し求めているので

23) André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II, p.680.

24) このような西欧人にとっての「独自の明白な事実」が死であり、また、文明によって互いに異質であるというマルローの考えは『反回想録』の中でも述べられているものであり、以下の引用部では西欧とインドとの対比が行われている。«Mais l'opposition la plus profonde se fonde sur ce que l'évidence fondamentale de l'Occident, chrétien ou athée, est la mort, quelque sens qu'il lui donne — alors que l'évidence fondamentale de l'Inde est l'infini de la vie dans l'infini du temps : «Qui pourrait tuer l'immortalité?» André Malraux, *Œuvres complètes*, tome III, pp.253-254.

25) Gérard Fritz もまた、マルローが歴史へと向かうのは歴史の一環をなす時間がもたらす無意味に対する意識が根底にあり、マルローにとって歴史とは時間による溶解であり、人間の時間に対する服従を意味していると指摘している。Gérard Fritz, *op.cit.*, pp.61-62.

す[26]。

このような自分の中に自身の意味を見出そうとする西欧人の姿を、マルローは鏡を見つめる人間として描いている。

> [...] 探し求めていた自らの姿にたどり着いた欧州の精神は、もはやその姿に熱中することはできないのです。欧州の精神が、これほど不安な発見をしたことはかつてなかった… [...] ヨーロッパよ、死せる征服者の眠る墓地、彼らの輝かしい名によって飾られているがために悲しみはより深くなる大いなる墓地よ。お前は私の周りに裸の地平線と、絶望をもたらす鏡、そしてその中に映る老いた孤独の支配者しか残していない。そしてこの支配者もまた、その生涯を終え、死ぬだろう。[...] 私は自分の鏡に映った姿を見つめる。私はいつまでもその姿を忘れることはないだろう[27]。

かつて様々な文明が栄え、征服者として君臨してきた欧州において、現代欧州は初めて、到達すべき目標としての、あるいは人間存在の意味を確約するものとしての世界ではなく、時間という人間存在の意味を無に帰させる不毛な世界を見出した。過去はもはや現代に至るまでの輝かしい航跡ではなく、人間達の努力や希望が時間の流れの中で消えていった、その儚さと無意味さを現代に突きつけるものでしかない。そして人間は、自らの意味を探すために、水槽の中の魚がガラス板に映った自分を見つめるように鏡に映った自分の姿を見つめるが、そこで見出すものは時の流れの中で老いていき、否応なく死へと向かわざるをえないという自分自身の運命である。この運命を描き出す鏡像を見つめることで、自らの運命の形態であるところの時間に対する意識だけが、より鮮明に見る者に意識されることになる。このように鏡像の中に自らの運命を見る人間の姿は、『王道』(1930) の登場人物ペルケンにおいても見受けられる。ペルケンは鏡に映った自分自身を見つめながら、「本当の死とは老衰」であると語る[28]。老衰とはすなわち「時間という残酷なものが癌のように決定的に広がっていく」、人間を否応なく死へと向かわせる時間の人間に対する絶対的支配力を象徴するものであり、この時間の支配下にあるという宿命が現代西欧人にとっての「人間の条件」[29] なのである。

このように、現代西欧人は自らの内に自身の存在意味を探し求めるが、死へと向かうしかない自らの姿を見つめるだけでは、ナルシスのようにただ死を迎えるだけである。だが、マルローにおいては、人間に対して支配的地位にある時間とそれがもたらす不条理に対する意識が出発点となり、行動へと向かうのである。

広州における革命を舞台にした『征服者』(1928) に目を向けよう。この小説の

26) André Malraux, *Œuvres complètes*, tome I, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1989, pp.79-80.
27) *Ibid.*, pp.110-111.
28) *Ibid.*, pp.393-394.
29) *Ibid.*, p.448.

主人公ガリンは共産主義勢力の一員であるが、彼自身の闘争の本質は共産主義革命の実現にあるのではない。彼の行動の本質は「人生の無意味さ、人間存在の不条理」を対象とするものであり、不条理に対する闘いである[30]。また、彼が闘争へと向かうその力は「世界の空虚さ」、すなわち全ての人間の生を虚無と忘却へと押し流し無に帰させる「時間」としての世界に対する意識から生まれてくる[31]。

> 「人間は不条理を受け入れながら生きることはできても、不条理の中で生きることはできないんだ。[...] 人間は、創造することでしか自分を守ることができないんだ。[...] ああ！五年後の中国の姿を、俺は見てみたい！存続すること、それこそが問題なんだ！」[32]

人間はやがて来る死の存在を受け入れながら生きることはできても、自らの存在意義全てを、時間の流れの中でただ死んでいく無意味な偶然として受け入れることはできないとマルローは考えている。故にガリンはこの不条理に対して自らの存在意義を「創造すること」によって見出そうとするのである。そしてガリンは共産主義化した新しい中国という国家を創造しようとする。しかしこれは、共産主義というイデオロギーが人間存在に意味を与え保証することが可能であるとマルローが考えていたからではない。『征服者』の中でマルローは、共産主義は「個人意識を退け、自我を忘れることを個人に要求する」と登場人物ニコライエフに述べさせている。これに対してガリンは自らの生の無意味さに対して行動する、すなわちガリンという一人の人間の中に意味を見出そうとする彼の思考は強く自我と結びついており、その意味においてガリンは共産主義者ではないのである[33]。また、Dominique Villemot や Pierre de Boisdeffre らが指摘しているように、そもそもマルローはマルクス主義者ではなかったのであり[34]、またマルロー自身『希望』(1937) の中では登場人物ガルシアに「どのような国家も社会機構も、人間の性格の高貴さや精神の質といったものを創造することはできない」と語らせており[35]、政治的イデオロギーや国家といった社会的なものと、一人の人間の精神といった内面的なものを相関関係があるものとして考えてはいない。マルローにおいて一人の人間の精神は、全体的なものとして成立するものではなく、社会から独立したものであり、孤立した状態で自らの運命、そして「世界」と対峙するものである[36]。ガリンが共産主義中国の創造を目指すのは、『王道』のペルケンの「死を相

30) *Ibid.*, p.221.
31) *Ibid.*, pp.259-260.
32) *Ibid.*, p.260.
33) *Ibid.*, pp.256-257.
34) Dominique Villemot, *André Malraux et la politique ou L'être et l'histoire*, L'Harmattan, 1996, p.98.
Pierre de Boisdeffre, *André Malraux La mort et l'histoire*, Éditions du Rocher, 1996, pp.32-33
35) André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II, p.338.
36) マルローはマルクス主義者ではないものの、自らは反マルクス主義者ではないと述べており、国家運営を担う政治哲学としてその力を認めている。しかし彼は、マルクス主義における芸術を社会の上部構造に過ぎないという考えを断固として拒否しており、人間の精神のみが可

手に賭けをし、地図の上に痕跡を残したい」[37] という願望と同根であり、中国を共産主義国家として樹立する、あるいは自らの王国を築くという行為は、一見地図上に自らの痕跡を残す行為、すなわち歴史への意志であるように見えるが、その内実は歴史の背後にある時間に向けられたものなのである。

年代記としての歴史は人間の行動の結果の時系列において、『希望』のヒメネスが述べるように「人間の行動を見つめ、そしてその行動の結果に審判を下す」だろう[38]。しかし人間をただの偶然とし死へと押し流す時間に内包されながらマルローは、その中で人間存在の意味を模索し創造することを希求するのである。

このように、マルローの小説における行動は、歴史的事件を背景としてはいるが、自らの鏡像に象徴される運命を対象とするものである。過去の文明が生んだ様々な神話がその精神構造や価値観に基づき世界に対する人間の位置づけ・来歴・そしてその意味を物語ったように、不条理な世界という水槽に内包された人間を描き出すマルローの小説は、現代西欧人の人間存在の意味を模索し物語ろうとする「現代西欧の神話」であると言えるだろう。

## 結論

以上の様に、マルローは各々独自の精神構造に基づき独自の真実を内包する文明の複数性を発見したことにより、多様な文明や精神構造を統合し一つの普遍的歴史に収斂することを目的とするヘーゲル的歴史観という「これまでの歴史観」はその統合力を喪失したと考えていた。そして人間の思考や行動を制限する「宿命の形態」としての水槽の中に文明の構成員である人間は内包されており、ヘーゲル歴史哲学に裏打ちされた西欧もまた、数ある水槽の一つに過ぎない地域的なものと見做されることとなったのである。また、過去の様々な文明の発見は、マルローにおいては全てを忘却と死へと運び去る時間という現代西欧人にとってのメタストーリーの発見につながった。ヘーゲル歴史哲学に裏打ちされていた歴史は過去のものとなり、歴史に対する意識は時間に対する意識へと置き換わったのである。このような時間という水槽に内包された現代西欧人の在り方は、まず1926年に出版された『西欧の誘惑』の中に既に見出せる。さらに1943年の『アルテンブルクのくるみの木』や1960年の講演においても、文明の複数性に基づくヘーゲル歴史哲学否定がなされている。これらの事実から、マルローの文明の複数性及び時間としての歴史という歴史観は第二次世界大戦以前以後で一貫したものであったと思われる。そしてこのような意識の下、マルローはその作品の中で歴史的事件を数多く取り上げ歴史に対して積極的な態度をとったのだと考えられる。彼の小説は、時間という水槽の中で人間存在の意味を模索し、創造しようとする現代西欧の神話なのである。

（大阪大学非常勤講師）

---

能とする独自の創造としての芸術は、社会や時代から生まれるのではないという考えを持っていた。堀田郷弘 , *op.cit.*, p.143.

37）André Malraux, *Œuvres complètes*, tome I, p.412.

38）André Malraux, *Œuvres complètes*, tome II, p.141.